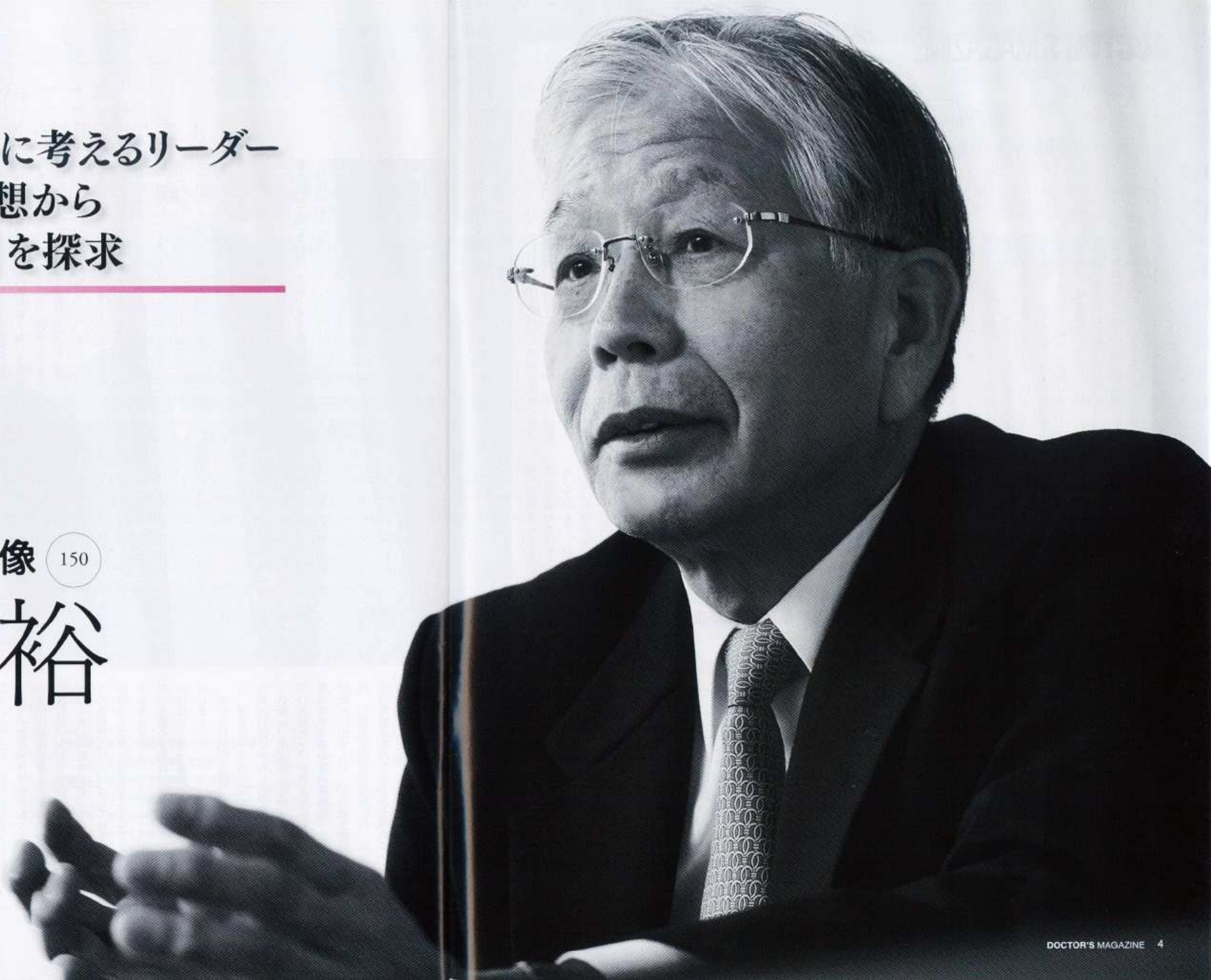


フェアを第一に考えるリーダー
外科医的発想から
『真・善・美』を探求

ドクターの肖像 150
跡見裕

杏林大学 学長

聞き手 / 中村明 ((株)メディカル・プリンシプル社 社長)
撮影 / 須藤夕子



「患者さんの信頼を得てこそ 医師の本当の楽しさが実感できる」



PROFILE

あとみ・ゆたか

- 1970年 東京大学医学部医学科卒業
- 1971年 東京日立病院外科医員
- 1972年 東京厚生年金病院外科医員
- 1975年 東京大学医学部第一外科医員
- 1977年 東京大学医学部放射線科助手
- 1978年 東京大学医学部第一外科医員
- 1980年 東京大学医学部第一外科医局長、同助手
- 1988年 カリフォルニア大学サンフランシスコ校外科客員研究員
- 1989年 東京大学医学部第一外科助手

- 1990年 東京大学医学部研究所非常勤講師
自治医科大学非常勤講師
- 1992年 東京大学医学部第一外科講師
吉林大学医学部第一外科教授
- 1998年 吉林大学附属病院副院長
- 2004年 吉林大学医学部長、杏林学園理事
- 2010年 吉林大学医学部第一外科教授退任
吉林大学学長

第一志望でなかった 医学の道

一時期、巷間を騒がせた「議員の世襲制」と同様、開業医の家に生まれた子供には、後継の問題がついてまわることが多い。杏林大学の跡見裕学長もその一人だった。

跡見氏の生家は、名古屋近郊の愛知県一宮市にある。現在は従兄弟が医院を継いでいるが、跡見氏が誕生したころは、内科医の父親と外科医の叔父が共同で経営する開業医院であった。子供時代の跡見氏はおとなしくて家で本ばかり読んでいたそうで、両親の教えや指導にも忠実に従う素直な子だったようだ。

「姉と妹は、ピアノ、習字、絵、をならい、日本舞踊は名取りになりました。私も習字、絵をならいバイオリンもやらされました」

母親の手を引かれて、小学3年生から3年間、日曜日になると名古屋までバイオリンの稽古に通ったという。しかし「内心、イヤでイヤでたまらなくて、それがトラウマになったのか、今でも音楽は大嫌いだし、字も絵も下手です」と苦笑する。

それでも小学生のときの文集に「将来は、シニバイツァーのような医者になりたい」と書き記しているのは、少なからず氏を取り巻く環境がかかわっている、と言えよう。

しかし名古屋市の名門、愛知県立旭丘高校に進学したことから、別の進路を考えるようになった。

「ちよようとテレビが普及し始めた時期で、ア

メリカからたくさんさんのテレビドラマが入ってきていましたが、その中で毎週欠かさず見ていたのが「弁護士ペリー・メイスン」でした。公正や正義に憧れる多感な高校生時代だったこともあり、将来は法学部に進みたいと思うようになった。

両親は反対こそしなかったものの、「一度だけいいから医学部を受けてくれ」と懇願され、東京大学理科三類を受験することになったが、「一発で合格」。

「合格したら、行くしかないですよ。最初から仕組まれていたかのように、周囲が医学部以外の道を選ばせてくれなかった、という感じでしょうか」

1963年、跡見氏は東京大学に入學。小学校から高校卒業まで、学校を一日も休むことのないような真面目な子供が、その反動か、これまでの分の遅れを取り戻すかのように授業にも出ず、テニスを中心に課外活動に勤しんだという。

「重要なのは主義・主張でなく 友情や信頼できる気持ち」

跡見氏が大学3年のときに、父親が急逝する。もともと卒業したら一官に戻り父親の跡を継ぐつもりだった。

「なんとなく後継の呪縛から解放されたような気になって、やるやる学生生活をエンジョイしているうちに、大学闘争が始まっちゃったんですよ」

これこそが天下を揺るがす大事件——いわ

ゆる「東大紛争」の勃発だった。1967年、跡見氏が4年生になったとき、東大医学部のインターン生(卒業後、医師資格をとるまでの実地修練期間中)が、不安定な身分のまま、無給で診療を行うことを問題にして、国家試験をボイコットしたことに端を発した。結果、1968年にインターン制は廃止されたものの、学生運動自体は全学、全国へと拡大し、安田講堂事件で集結を迎えていく。2年に近いストライキの間、クラス討論に明け暮れ、思想的にも多岐であり、異なった生活歴を有している学生が、真剣に討議をしていた。

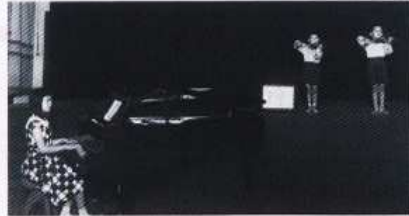
「多くの学年が内部で分裂しましたが、私達の学年は最後までまとまっています。議論を通して、少しでも理解し合おうという仲間がたくさんいたのです。今でも、大学の仲間との信頼関係は大切にしています。この時の経験から本当に重要なことは、友情や信頼できる気持ちなのだということがわかりました。主義や主張は何となく唾つぼけて、最終的にはどこかで裏切る可能性があるような気がします」

同じ世代間の感性はどこか近いものがある。跡見氏とその仲間で、昭和45年卒業の消化器外科医を中心に45会を設立した。

45会は、年代的にも今、組織の頂点に立っている世代で、東邦大理事長の炭山嘉伸氏、東海大理事の幕内博康氏、がん研有明病院院長の門田守人氏、谷川記念病院の谷川允彦氏、近畿大学学長の塩崎均氏、釧路労災病院長の草野満夫氏などが名を連ねている。「大学は異なれ、自分の存在に命を賭けて行



東京大学第1外科の仲間とテニス合宿
武藤徹一郎東大名譽教授、杉原健一東京医科歯科大学教授、
宮澤幸久帝京大学教授らと



市の音楽祭で準優勝（右端が小生）ピアノを弾いているのが
姉（小学校5年生）



昭和38年東大入学式。母とともに



姉、善兄（宮崎秀樹氏）と万座スキー
場で（高校2年）



恩師の森岡恭彦東大名譽教授とともに



学校祭での扮装（右が小生）
（高校3年）



理事長をしている日本消化器関連学会
機構医療研修会で
左より菅野自治医科大学教授、内藤エー
ザイ社長、小松東芝メディカル顧問、
吉川元東大総長、金澤学会会議議長、
中村東大教授とともに

助していた時期を共有した仲間達ですね。大
学を越えて、一緒に教科書を出したり、医療
経済を討議したりしていますが、最近はず
ろも仲良くやっています」

話を学生時代に戻すと、関争の影響で留年
することになる。また、卒業後すぐ教育学部
の大学院生だった順子氏（現東京大学名誉教
授）と結婚したこともあって、そのまま東京
に残ることになった。

父親の後を継いで内科医になる必要もなく
なり、義兄の宮崎秀樹（元参議院議員、元日
本医師会副会長）が外科医だったことにも影
響され、外科医になろうと東京大学医学部第
一外科に入局する。消化器外科の中でも特に
診断が難しく、治療成績もはばかしくない
「暗黒の機器」と言われる膀胱を専門にした。
この1年の間、放射線科助手として放射線
診断にかかわる。

「治療は診断からスタートするもの」という
のが私の考え方ですから、非常に勉強になり
ました。その後、専門になった超音波診断な
どもこの流れを汲むもので、若いときの勉強
が後年、大いに役立ちました」

外科入局後、特にながりが深かったのが、
昭和天皇の執刀医にもなった森岡恭彦氏だ。
ちなみに森岡氏は1955年に東京大学医
学部を卒業し、東京大学医学部第一外科に入
局。1966年にフランス政府給費技術留
学生としてパリ大学に出張。翌年に戻ってき
てすぐに医局長となる。

と決めていたからですが、ちょうど森岡先生
のご夫人が産産を控えている時期に当たって
しまい、残念ながら主賓として出席してい
たできませんでした」

森岡氏は、1972年に自治医大教授と
して第一外科からいったん出るが、1981
年に再び第一外科の教授として戻る。
1987年、昭和天皇を執刀したが、跡見
氏はすでに、医局長となっていた。

「新聞記者が連日、私の自宅にまで押しかけ
てくるほどの大騒ぎでした。森岡先生のお手
伝いをしていたのですが、ある日、陛下が発
熱され、目の前で森岡先生と二人で、どうし
ようかと考え込みました。私は癖で腕を組ん
でしまうのですが、慌てて手を下ろしたこと
を思い出します。天皇陛下の前で腕を組むな
らんで不敬罪にもなりかねませんからね」

森岡教授時代に、東京大学第一外科医局長
に就任する。

「当時の第一外科はきわめて民主的に運営さ
れていて、医局員の投票で選ばれた医局長が、
出張先などの人事を決めるんです。教授は殆
どが事後承認で、たまに不愉快そうな顔をし
ましたが、異議は唱えられませんでしたね。
34歳で医局長になり、関連病院の人事、任期
制助手や外勤などの運営を一手にやりまし
た。医局員の数も多く、かなりが年配の方で
したが、よく盛りたててくれました」

森岡氏からは「フェア」を 留学先では組織のイロハを学ぶ

「森岡先生は、好きとか嫌いとかに関係なく、
能力をきちんと評価し、嫌いな方でした。
僕も、杏林大学に赴任した最初の挨拶で、教
室の方に『正直であれ』と言っていました」

その後、森岡氏と付き合いの深い、カリフォル
ニア大学サンフランシスコ校（UCSF）
に留学する。留学先の外科はエチオピア人が
チエアマンをやっていた。アメリカの医学部
では5本の指に入る優秀校であり、ノーベル
賞も数多く受賞していた。

「ドバズという名の African American」でした。
当時のアメリカでそのポジションになれるア
フリカ人は珍しく、西海岸のカリフォルニア
だからこそチエアマンになったのだと本人も
言っていました。このときに彼から学んだの
は、一番最後に必要になるのは、「その人の
持っている人柄だということ」

留学中、このドバズ氏から、組織の上に立
つ人間のイロハの多くを知ることになる。

UCSFで膀胱センターを作ることにな
り、その人材をリクルートすることになった
時のこと。ドバズ氏から、「将来役立つとき
が必要だから、リクルートの会議に出ろ」
と言われた。

「参加し評価方法を見てみると、日本のよう
に学閥ではなく、人と人との関係で見ている
んです。個人の能力だけでなく、家族構成か
ら、両親の状況までを知っているんですね。
そこでアメリカは人間関係を何より重視する
社会だということを知りました。日本だと、
同じ大学の門だと、顔を見なくても、無
条件で紹介状を書くのです。アメリカでは、
そんなことはあり得ないことでした」

森岡氏が紹介してくれた留学先としても納
得がいく。たった1年足らずの留学だったが、
跡見氏にとって、人事のネットワークづくり
のノウハウを知る貴重な体験ともなった。



跡見氏が創設者で理事長であつた Asia-Oceanic Pancreatic Association (AOOPA) の贈

将来の可能性を秘めた、 杏林大への赴任を決意

帰国後、東京大学第一外科に戻り、自治医
科大学や医学部研究所などで非常勤講師を務
め、講師を経て、1992年に杏林大学教授
に就任する。杏林大学に応募したのは、同じ
第一外科の先輩で、当時、杏林大学の学長だっ
た竹内一夫氏から、「ウチに来ないか」と声を
かけられたのがきっかけだった。かつて竹内
氏のご母堂が、東京大学第一外科に入院され
たおり、跡見氏が受け持ち医となっていた。
そこで、同じ愛知県出身で親しくしていた、
当時厚生労働省にいた小林秀實氏（後の健康
政策局長）に相談をもちかけたところ、「これ
から伸びていくことが期待される大学だか

ら、絶対にそこに行けよ」と勧められたとい
う。ほかにも話はあったが、自分の力を発揮
できるこの魅力を感じて、杏林大学に赴任す
ることとなった。

地域に密着した病院へ リーダーシップを発揮

赴任早々、竹内氏から言われたことは、都
心の病院に行ってしまう近くの住民に、この
病院に来てもらうことだった。杏林大学医学
部附属病院は都心まで電車で30分以内に行け
る位置にあった。

跡見氏が就任するや、年間500件ほど
の手術件数が、退官する2009年には
1030件と増えていった。特に臓臓に関
しては、それまで数例しかなかった膽頭十二
指腸切除術が毎週のように行われるようにな
り、術中の門脈超音波検査や放射線放射も頻
繁に行われるようになった。また、小児外科
など他科の手術指導も行い、東京大学第一外
科で振るってきたメス裁きに感心する医師も
少なくなくなったという。2008年創設の
杏林大学病院がんセンターでは、その体制づ
くりにも尽力し、がん診療体制を格段に進歩
させ、名実共に地元住民が行く病院として、
竹内前院長との約束を果たしている。

2005年には、外科医として初めて、
財団法人日本消化器病学会の理事長になる。
同学会は、明治31年(1898年)創設とい
う長い伝統を持ち、現在では会員数3万人超
を擁する国内では規模の大きな学会。110

「でも、僕がここに居って、どうぞ学生さん
来てくださって言っても、なかなか学生は
来ませんよね」

そこで、教員には、学生と軽食をとる空間
を作ってもらうなど、様々な工夫を提案して
いる。

「学生とほとんどコミュニケーションを持っ
てもらおうと言っています。杏林の教員には
行動する教育者であってほしいですね」

昨年は文系の全ての1年生の教室に行き、
各10名前後の学生諸君とHave a Breakで話をし
た跡見氏。今年は、あることを計画した。

「入学した1年生全員と少人数単位で昼食を
食べる計画です。これも、外科的な発想か

年以上の歴史の中で、外科医が理事長になっ
たのは後にも先にも跡見氏だけだろうだ。

「狐筆から駒」ですね。学会内部の運営を円
滑に進めようと言うことで、選ばれたので
しょう」と謙虚に語るが、周囲からも一目置
かれた存在であったことがうかがえる。

理事長として公正をモットーに様々な改革
を進め、複数の学会を束ね、学術集会の参加
者が2万人を超える日本消化器関連学会機構
では、その理事長にもなり、現在もわが国の
消化器病学をくわいしく牽引している。

大きな責務を背負って 副部長、医学部長、そして学長に

教授就任では、教室員に上品な外科医を
めざそうと言ったとか。外科教室は、明る
く楽しいものとなっていく。

6年後には副院長を併任、さらにその6年
後の2004年には医学部長、学校法人理
事を併任し、多忙な生活を送る。2010
年3月に教授を退任し、翌4月から学長とし
て、大学全体の運営に当たることになる。

杏林大学は、スタートこそ医学部だが、現
在は保健学部のほか、総合政策学部、外国語
学部などの文系学科もあり、大学院も設置し
ている。大学の建学の精神は、「真・善・美の
探求」。創立者松田進勇氏が書いた座右の銘
の十ヶ条目にこうある。「真善美の探求を心
がけよ、特に医療に携わる者は、生涯、医人
道を實踐せよ」と、跡見氏は、この精神を外
科医らしいアプローチで行動することから探

な。外科医ってプラグマティックですから、
目の前にあるものをどうするか、まず行動を
起こして、その中から何かを見つけて、次の
ステップに移っていくわけです。待っていて
はダメなのは、と思っっています」

外科医は面白い仕事なんだ それを僕らが提供しなくては

現在、外科医のなり手が少なく、全体に減
少しており、多くの外科医が危惧している。
跡見氏もその一人だ。跡見氏はいくつかの原
因を挙げる。その一つは、外科医そのものの
労働条件が悪いということ、外科医に対し



日本消化器外科学会時の友人の外国招待者とともに



学会で田原総一郎氏と共同で司会

求し、大学改革にもメスを入れる。
特に力を入れたのは、学生とのコミュニ
ケーションの在り方で、例えばアメリカから
輸入された「オフィスアワー」という制度だ。
これは教育用語の一種で、最近、文部科学省
も奨励しているものだが、教授室などをオ
ープンにして、毎週決まった曜日の決まった時
間に学生に来てもらうって、自由にコミュニ
ケーションをとろうという制度だ。

る評価が低いということだという。また、外
科そのものを魅力あるものにするのが重要
だという。

「私たちが入局したころも、案と案じゃな
いとかで選んでいません。365日、夜中ま
で働かなくては行けなかった。じゃあ、なぜ
外科医になったかと言えば、外科が面白そう
だったからです。内視鏡手術がワッと普及し
始めたころ、外科医も増えたんです。だから、
「外科医は面白い仕事なんだ」ということを、
外科医側が提供しなくては行けないのです。
私が会長をやっている日本臨床外科学会の役
割も大きいと思います」

臨床研修制度が始まったからはなおさらだ
と、跡見氏は考える。

「診療科を選ぶ前の研修期間中に、外科の先
生たちが毎日の診療で疲弊している姿を目の
当たりすると、外科医をやりたいという気持
ちが萎えてしまうのでは？やはり、労働条件
をよくしたり、尊敬されるような存在になる
よう、学会側もきちんと提示していかなくて
はいけないと痛感しています」

最後に跡見氏は若手医師に向けてメッセー
ジを送る。

「医師という職業を選んだ以上は、「1人1人
医療とかわりあつていくか」を真剣に考える
べきです。医師になったからには楽はできな
いと思っただけで、そこにいつても楽
しようと思わないで、患者さんの信頼を勝ち
取ってこそ、医療が成り立ちます。患者さん
の信頼を得てこそ、医師の本当の楽しさが真
感できる私は信じています」

